

白金蔵



平成25年4月発行 第26号

白金葭定例句会案内

月例句会報、'13／4／19 8名欠け句名兼體蜂、枝垂桜

四月三十日(火)東京駅・丸の内吟行句会(別案内)

五月十七日(金)12:00~15:00(アビスタ第5学習室)

兼題:柏餅、夏場所

六月二十一日(金)12:00~15:00(アビスタ第一和室)

兼題:五月雨、櫻桃忌

七月十九日(金)12:00~15:00(アビスタ第二学習室)

柏餅、夏場所の参考句(五月十七日分)

飽きるほど海を見てきて柏餅

うたた寝の夫のかたわら柏餅

てのひらにのせてくださる柏餅

世の中にふつと手の出て柏餅

柏餅とともに父似の姉妹かな

皮剥けば餡の色透く柏餅

夏場所のテレビ美し露地狭く

夏場所やひかへぶとんの水あさぎ

夏場所のとどろにあけし浅翠り

夏場所のはなし太鼓や川向ふ

朝より高湧く雲や五月場所

夏場所や汐風うまき隅田川

川島由美子

木島欽子

後藤夜半

柳田芽衣

井尻妙子

光成高志

後藤章

久保田万太郎

安藤姑洗子

松本たかし

武原はん

枝垂桜揺れて東寺の塔見ゆる

増田悦子

飯田孝三

幹の瘤虚子忌の桜ぽぽとかな

三歳で死にて日暮のぶらんこに

転ぶなよ飛石ぬるる花の庭

寺いらか混みあふしだれさくらかな

乙女の像の脣のへ昼の蜂が飛ぶ

増田陽一

足長蜂よくとぶ日なり遠き地震

足の裏にさはる小石や春の暮

仰向けに巣を掘みたり足長蜂

枝垂桜花振り分けて異界みゆ

蜂刺してゴリラのあたま変形す

夏場所のとどろにあけし浅翠り

夏場所のはなし太鼓や川向ふ

朝より高湧く雲や五月場所

夏場所や汐風うまき隅田川

花明り東寺の塔の黒々と

蜂とまり、ちらの歩みとまりけり

手賀の蜂向う岸までとぶつもり

亀多き池に枝垂るる桜かな

惣隠の八重枝垂桜かな

サラリーマン足長蜂に刺されたる

久遠寺のここにもしだれさくら咲く

水の上に伸ぶる枝に咲く桜かな

養蜂箱開ければ蜂のびつしりと

この揺れはフレア・スカート糸桜

花冷のたそがれ時の素振りかな

今日もまた働き蜂の夜が明くる

琥珀なる菩薩のおはす暮の春

雨上がる待つてすぐ発つ蜂の群

光成高志

法務局花壇一坪チューリップ

振り袖のような枝垂桜かな

仁王門枝垂桜に囲まれる

蜂を避け蛇口の水を手で飲みぬ

つり鐘をまわって出てくる蜂と逢う

吉羽多美子

蜂の巣をあふぐ黒堀長屋門

夜桜を見るに都電を乗りつぎて

小糠雨海棠紅を濃くしたり

新しき卒塔婆桜吹雪かな

寺の鐘枝垂桜の風となる

松村幸一

一蝶のくぐり抜けけり花御堂

詫びにけり灌仏の頭に杓当てて

春潮を足蹴の蛸の行方かな

にぎやかに泡をぶちまけ春の潮

枝垂桜ふぶきふぶけり月残る

青木啓泰

浅野正美

老幹の枝しなやかに糸桜
桜咲く来し方思い古稀の席

プランターに一気に開くチューリップ

蜜蜂の動きせわしき翅音かな

手を上げて返事練習入園児

花冷や町内会は焼きそばを

田舎より筍届きおすそわけ

荒れ果ても墓地にもこんもり雪柳

大雪の田圃に炭の粉をまく

日をせなに木蓮北に向けて咲き

小山陽也

陽也

幸一

正美

孝三

高志

陽一

孝三

多美子

多美子

正美

正美

正美

陽也

孝

花冷や町内会は焼きそばを
焼きそばの町内会や花の冷え
一蝶のくぐり抜けけり花御堂
老幹の枝しなやかに糸桜
日をせなに木蓮北に向けて咲き
老幹の枝しなやかに糸桜
幹の瘤虚子忌の桜ぼぼとかな
サラリーマン足長蜂に刺されたる
蜂刺してゴリラのあたま変形す
幹の瘤虚子忌の桜ぼぼとかな
花明り東寺の塔の黒々と
三歳で死にて日暮のぶらんこに
小糠雨海棠紅を濃くしたり
転ぶなよ飛石ぬるる花の庭
寺の鐘枝垂桜の風となる
蜜蜂のせわしき動き羽の音
蜜蜂の動きせわしき翅音かな
振り袖のような枝垂桜かな
亀多き池に枝垂るる桜かな
手を上げて返事の練習入園児
田舎より筍届きおすそわけ
寺いらか ～
寺いらか 圧しあふしだれさくらかな

選句結果（数字は入選数 左添書きは添削句）

足長蜂よくとぶ日なり遠き地震
この揺れはフレア・スカート糸桜
春潮を足蹴の蛸の行方かな
法務局一坪花壇にチューリップ
法務局花壇一坪チューリップ

啓泰 幸一 みち 陽一

寺いらか混みあふしだれさくらかな

雨上がる待つてすぐ発つ蜂の群
新しき卒塔婆桜吹雪かな

手賀の蜂向う岸までとぶつもり
足の裏にさはる小石や春は逝く

足の裏にさはる小石や春の暮
琥珀なる菩薩のおはす暮の春

詫びにけり灌仏の頭に均當てて
乙女の像の臀のへ昼の蜂が飛ぶ

今日もまた働き蜂の夜が明くる
仰向けに巣を掴みたり足長蜂

仁王門枝垂桜に囲まれる
水の上に伸ぶる枝に咲く桜かな

大雪の田圃に炭の粉をまく
花冷のたそがれ時の素振りかな

夜桜を見るに都電を乗りつぎて
蜂を避け蛇口の水を手で飲みぬ

蜂避けて水を手で飲む蛇口かな
蜂の巣をあふぐ黒堀長屋門

つり鐘をまわつて出てくる蜂と逢う
荒れ果ても墓地にもこんもり雪柳

寺いらか混みあふしだれさくらかな
雨上がる待つてすぐ発つ蜂の群
新しき卒塔婆桜吹雪かな

手賀の蜂向う岸までとぶつもり
足の裏にさはる小石や春は逝く

足の裏にさはる小石や春の暮
琥珀なる菩薩のおはす暮の春

詫びにけり灌仏の頭に均當てて

乙女の像の臀のへ昼の蜂が飛ぶ

今日もまた働き蜂の夜が明くる

仰向けに巣を掴みたり足長蜂

仁王門枝垂桜に囲まれる

水の上に伸ぶる枝に咲く桜かな

多美子 多美子 多美子 多美子
陽也 啓泰 啓泰 啓泰 啓泰

幸一 正美 幸一 正美 幸一 正美

陽一 正美 陽一 正美 陽一 正美

悦子 悅子 悅子 悅子 悅子 悅子

みち みち みち みち みち みち

孝三 幸一 幸一 幸一 幸一 幸一

陽一 幸一 幸一 幸一 幸一 幸一

悦子 悅子 悅子 悅子 悅子 悅子

高志 高志 高志 高志 高志 高志

選句の鑑賞

老幹の枝しなやかに糸桜

正美

光成高志

こういうしだれ桜をどこかで見た記憶がある。その記憶を呼び覚ませて呟れる句である。記憶は心に残っているから魂でもあり、長い間に醸成されるものだ。培養されると言つてもいい。却初の桜という老木の桜が清水公園にある。掲句のような老幹なるも枝は若々しく、これは枝垂れではないが、これを目当てに花見に行く人も多いと聞く。「枝しなやかに」という措辞が糸桜の有様をまさと目に見せてくれる。

夜桜を見るに都電を乗りつぎて

多美子

口をついて出てくるのは、「五月雨に鳩の浮巢を見に

久遠寺のここにもしだれさくら咲く
桜咲く来し方思い古稀の席
にぎやかに泡をぶちまけ春の潮
枝垂桜花振り分けて異界みゆ

プランターに一気に開くチューリップ
蜂とまりこちらの歩みとまりけり
惻隱の八重枝垂桜かな

行む」（芭蕉）である。ちよつと、風狂心に違いがあるが、夜桜を見るのに都電を乗り継いで、愛宕から上野の山まで行つたことがあるとは作者の弁。ごどごど

都電に乗つて町並をやり過ごし、夜桜を見に行つている心のときめきが若々しく、それを回想している今の

作者の健全なこころばえがよく見えてくると思います。

大雪の田圃に炭の粉をまく

陽也

これは越後など豪雪地帯の田圃の風景であろう。炭を撒かれて黒々とした田圃と周りの雪景色の対照が眩しいほどである。雪解けを早めるための処置であろう

が、その風景のはつとさせる美しさが省略されている。

今日もまた働き蜂の夜が明くる

みち

毎日毎日働き詰めのサラリーマンの生活ではなく、文字通りの働き蜂の朝が明けたのだ。雨の日や風の日は出て行かない。百姓の生活とそつくりであるとか。私が鑑賞している向うで右のようなことをみちさんが言うものだからそのまま打込みました。

春潮を足蹴の蛸の行方か

「水を蹴り目高は音に直ぐ曲る」の句を作つた時、

目高の様をよく見たが、蛸の泳ぐ様は、テレビ画面でしか見たことはない。八本の腕を閉じて水を蹴りすつと泳いで去る様はこのとおりであった。「蛸の行方か

幸一

な」と詠嘆の主体が行方なので、春潮の季感が薄められないか？と思うが、ここは宿題にしたい。

一蝶のくぐり抜けけり花御堂

幸一

一頭の蝶がこともあろうに花御堂をくぐり抜けていったことがあつたなーという回想の句である。「けり」の過去の詠嘆がよく利いている。花で一杯飾られた花御堂の水盤に立給う天上天下唯我尊の誕生仏の様や堂内での読経の響きなどが想像される。

足長蜂よく飛ぶ日なり遠き地震

陽一

足長蜂のよく飛ぶ日も遠いところでの地震でも心平穩には居られない。私は足長蜂に脚を刺されたことがある。ナイフで刺されたような痛みであつた。畑作業を放りだして家に帰つて自ら処置した。あの時の痛みは、腰痛どころではなかつた。そういう足長蜂のよく飛ぶ日は遠いところで地震があつた日、どちらも怖い。遠近の事象で幸いではないか。これが足長蜂に刺された途端、近いところで地震に遭遇したらどうなるか。そういう取合せまで想像させる凄い句である。

飯田孝三

サラリーマン足長蜂に刺されたる

高志

サラリーマン受難の一瞬である。「たる」は、は

たと驚き啞然の態、かつ、そこはかの諧謔の余韻を漂わす。

サラリーマンといえば目に浮ぶのが、街頭を足

早に出勤する列。大股の背広姿がどこか足長蜂に通じる。なにせこの頃はみな足が長いしなあ。さはさりながら、定昇、ベア見送り、公務員叩きとご難づきの

ご時世、「泣ツ面に蜂」の図一幅である。なに、出勤の列には女性も? こちらは直に腿長? ンム、蜂が刺すのは、男の横つ面だ。句会で陽一さんから、上「郵便夫」「交通巡查」ではいかが、とのご提言、確かにその方が滑稽図が目に見える。掲句は「具体」より諷刺の「含意」に重きを置いたとも見られよう。

この揺れはフレア・スカート糸桜

みち

しだれさくらがゆらりと春のそよ風を孕む。まづ、出だし「この揺れは」が秀逸。ゆつたりとした調べがほのと紅を纏う、枝垂桜の清雅、豊潤な揺らぎを髪髪させる。「フレア・スカートとも揺れて糸桜」と比べれば雲泥。また、「糸桜」の收めは、語呂のせいのみではない。「しだれさくら」では上五「揺れ」と重なり放漫、「枝垂桜」では重くて揺れかねる。而して「イトザクラ」の韻きが、風に揺らぐ糸桜をまざと目に見せる。

少々余談、フレアは元々、太陽の黒点付近に閃き、彩層の明るさを増す宇宙現象。地上、目交いのしだれ

桜のゆらぎに、天地感合の氣さえ籠るではないか。

仁王門枝垂桜に囲まれて

啓泰

三歳の童も云う「囲まれて」が、こんなに映えるとは知らなかつた。桜しだれる仁王門の景色が目に見え、界限のざわめきが聞こえる。「普段着で普段のことば花の醉ひ」（擬綾子）、ハ? 花見は束の間の離俗の愉悦、「日頃」「普段」は無用。へいへいご尤。ほろ酔いしたばっかりに、つい地が出ちまつて。普段着（あ、いけねえ）詞の抜けつぶりが、いやはや、見事なんで。

春潮を足蹴の蛸の行方かな

幸一

「足蹴」とは大和ことばの巧みな漢字転換だ。印象克明な「道名詞」ではある。とはいへ、蛸の足蹴を直に見たことはない。とつさに思い浮べたのが、スイミングレースのターンの情景だ。颯爽、たゆとう春潮を蹴る蛸の姿態が見えてくる。行方「かな」が決まる。さりげなく抱懐は豊かで深い。又、「蛸壺やはかなき夢を夏の月」（芭蕉）より、言わず、軽やか、そこはかの諧謔をにじませて面白い。

花冷や町内会は焼きそばを

陽也

墨田界隈は桜の名所、町内会主催のお花見会場である。客に焼きそばをふるまう。「花冷」の斡旋がその季の気象の機微をとらえて手柄。囁目でも同じ。さあさ

あ、温かい焼きそばをどうぞ”“ほうほう、有難い、それにして、不陽気だねえ寒暖の出入り坪もなしだ”。

蜂刺してゴリラのあたま変形す

陽一

何ともいいようのない異容、奇態なゴリラの頭部、すなわち「あたま」。頭では動物一般、その趣は出ない。いやはや、その由来たるや、さもありなん蜂に刺されたからだとな。女蜂（刺すのは雌だとか）一匹、いやいや、雀蜂の集団襲撃に遭遇したのだろう。それとも熊ノ蜂かな。とまれ、ゴリラ殿の周章狼狽ぶりが想像するだに滑稽、いやお気の毒。頭尾呼応、漢字二字の措辞も納得がいく、相身互いの役どころ。とりわけ結「変形」がむんずと魁偉な塊を物見せる。

一句鑑賞 vi (25号分)

武者昭七

雛人形皆白面がおそろしき

高志

雛壇の前に正座したまま雛たちの白面のおそろしさに呪縛されたように身動きもせぬ少年。少女ではない。こんな感覚は女性にはおそらくあるまいと思うからだ。白面のおそろしさは女性たちのおそろしさだ。あるいは作者自身の体験だろうか。揃いも揃つてなぜ雛たちはみな白面なのだろう。それが恐ろしいのだ。おそ

ろしさの訳を「皆白面が」ととらえたあたり意味深長にして絶妙。（作者は女性恐怖症かどうか僕は知りません）

風強し遠くなりたる受験の日

悦子

風の音がひとの思いを遠くに運んでいくことがある。春先は烈風が吹くことが多い。受験シーズンと重なる。それがかつての受験の日々の記憶を呼び起す。「遠くなりたる」に風に運び去られたようによくに過ぎ去つた受験期の日々への思いが込められている。思えば受験の風景も変わってきたものだ。受験校の門前にまで親が付き添い、予備校の教師が激励に馳せ参する時代なのである。それでも受験が孤独な営みであることは変わりはあるまい。勝ち組といい、負け組といつても風に運ばれていくその先は誰にもわからぬ、などとへそ曲がりは思つたりするのである。

ミニ電車花から出でて鉄橋へ

弥栄子

昔、犬吠崎を訪れた時のこと。藍色の海を背景に咲き誇る菜の花の広がる地平を一直線に走つてくる小さな電車を見た。たつた一輛だ。それがくびきを解かれた仔馬のように首というより車体全体を振り立て線路の上を弾みながら走つてくるのだ。（乗っているお客様はたまるまいが）春光あまねき岬の果てを走り回れるのが嬉しくて嬉しくて仕方がないというふうだった。ああ、

いいなあ、一生懸命やつてゐるなあとこちらまで嬉しくなつたものだ。いま都会を走る電車はジュラルミンの蛇のよう長いばかりだ。ロマンがない。三陸の海沿いのひん曲つてしまつた線路の映像を見るたびに、早く楽しい電車が走つてほしいと思う。ミニ電車万歳。

ハガキ句管見（第二十七報）

飯田孝三

夏潮やテトラポットの巨体打つ

「巨体」が眼目。文理、テトラポットの形容だが、即ち、句のいのちのあり処。打ち寄せる夏潮の力強さを

ハガキ句二十七報（07／6／22）

琴の爪四角が良けれ雪柳

いさぎ良く口引き結び鮎焼かる

植ゑ終へし畦十文字畠鴉

くくませる乳首汗沁む畔の隈

城ヶ島四句

夏潮やテトラポットの巨体打つ

白秋の船唄流る船遊び

グライダー飛ばす熟年青岬

LNGタンカーがゆく夏の海

〃 高志 〃 敏子

哲夫 妙子 孝三

まざと見せ、テトラポットは揺るがない。俳句は一語が決める。「や」が効く。結び「くつ」の呼応がぴたり。LNGタンカーがゆく夏の海

高志

昭和一桁ならずとも城ヶ島といえば白秋。懐かしい。だが、そこに寄りかかった句ではない。大型タンカーも通う湾に沿う遊船の情景をその場に立つてとらえる。（船内からか）白秋の唄が磯に流れる。手柄は、結「船遊び」。眼前の光景を広角で切りとり、湾や磯の「々」を子細に見せてくれる。「船唄」、「船遊び」のルフランが韻きの快適もさりながら、場面の賑わいを生きいき想像させる。

グライダー飛ばす熟年青岬

熟年とグライダーとの取合わせが面白い。青岬のお膳立ても周到だ。諧謔が匂う。結「青岬」は、場の臨場感。

琴の爪四角が良けれ雪柳

四角の爪の存在感と雪柳の無礙の風態。乾いた音色

哲夫

と嫋嫋の風合い。その対照が狙いどころ。「良けれ」に功罪。いま一つ抜けない。

いさぎ良く口引き結び鮎焼かる

妙子

「いさぎ良く」は言いたくない。

先日の小石川後楽園吟行は、久し振りの再会で愉快でした。いただいた、「萱」を読みました。主宰・虎童子氏の句（風萱集）はかつちりして、外連味がない。手練。だが、なにやらオチが用意されている感じで、不思議が乏しい。ために、抜け切れない。

いただいたのは次の貴句。

姉捨や坂の途中の枯柏

（青萱集）

モアといふ鳥の骨格春愉し

（萱集）

尾を水平に水平に雉子歩む

（萱集）

一句目、中「坂の途中の」に、坂をゆく、こころ塞

ぐ重い足取りが見てとれる。座「枯柏」の象徴性が深い。根方に姉の姿さえ重なる。重い句である。「土筆立つ面影塚の正面に」とともに、臨場、具体で、正統、高格の句。二句目、「萱集選後感想」欄で鑑賞の一句。更に、口誦のよろしさが愉しさに輪をかけることを加えるべきだろう。三句目、「はがき句（25報）管見」すでに披見。（H. 19. 7. 4）

お便り広場（到着順、敬称略）

早々と吟行のご案内ありがとうございました。参加の予定です。貴兄のご努力にお礼申し上げます。

（3/14 Cメール 伊藤一艸人）

春爛漫となりました。いつもお知らせ有難うござります。実は、少し体調を崩し俳句を休んでおります。又元気になりましたら、私の方からご連絡致します。ありがとうございます。今度一度畠を見に行きたいです。又ね、下さいませ。今度一度畠を見に行きたいです。又ね、ありがとうございます。（3/5 吉野高代）

前略白金霞三月号有難く拝受しました。二十七日はわざわざ出向いて頂いて恐縮しています。よろしくお願い致します。いろいろお話を聞かせて頂くのが楽しみです。拙稿はご返送に及びません。適当に願います。

（3/22 武者昭七）

前略昨日は（廿七日）は大変楽しいひと時を過ごさせて頂き有難うございました。めずらしいお土産まで頂戴して恐縮いたしております。今後ともよろしくおつき合いの程お願いいたします。帰りの電車の中で「天空にひろめく蛇」の末尾に書き添えた青邨の句（山口青邨かどうか分かりません。歳時記で見つけただけですから）を青畠の句と間違えてお話してしまいました。お詫びいたします。原稿これからも寄せさせて頂きました。

く思いますが、ご自由にご利用頂ければ幸いです。奥様にもよろしくお伝えください。忽々

(H. 25. 3. 28 武者昭七)

白金葭三月号拝受致しました。砂町銀座まで足をのばしておられる、ことを知りビックリしました。JTBは亀戸店は閉鎖し、砂町のイトーヨーカードーの店内に数坪となっています。我が町は銀行もなくなりました。(東日本銀行だけはありますが)我孫子日記を見る度に感嘆しております。俳句一筋ですね。そしてこの冊子の作成、いつのまにか、一六頁までぎっしり。益々のご活躍を。(H. 25. 3. 28 小山陽也)

先の浅草歓談、そんなに喜んでいただき、嬉しい限りです。昭七兄にも伝えます。兄とは国文専門家と社会科学生齧りの違いも面白く楽しんでいます。専ら、文学・文芸の知識を貰っています。久米島土産を有難うございました。

糖黍嚙み齧合はせ百五十三

潮風の波音のふと黒砂糖

どこぞからそこは俺の地黍畑

御句“しだれさくらの傘”いいですね。再見、お礼

まで。(H. 25. 3. 31 飯田孝三)

東京駅吟行句会の案内拝受、返信の遅れすみません。

(H. 25. 3. 14 小山陽也)

よろこんで参加させていただきます。つまる話、聞きたいこと沢山あります。4月6日～7日は吾が結社「運河」の四国吟行会なので、(神戸三宮が集合場所)5日の日を前泊して、西宮靈園に行き誓子先生の墓参りをして来ます。20回忌なので。では4／30(火)を楽しみに待ちます。(H. 25. 4. 1 佐藤宏之助)

先日は奥様にもお目にかかるて(お名前はかねて句を通して存じ上げていましたが)大変嬉しく思いました。話にも花が咲いて同好の士を得た思いがしました。今後ともぜひともよろしくお願いいたします。拙稿同封しました。処理はご自由に願います。又、お話のできる機会を楽しみにしております。忽々

(H. 25. 4. 9 武者昭七)

四月三十日(火)吟行のお葉書頂きました。前々から心機一転のため半日位光成さんと共に俳句づけの日々をと思っておりました。是非参加させて頂きたいと思ひます。皆様と御目にかかるだけで十分です。これで四月は上中下旬と楽しみができました。ありがたいくことです。当日好天気であればさらに良いのですが。よろしくお願ひ申し上げます。

前略、この度は御誌の貴重な紙面をお割り戴き、小

誌の合同句集をご紹介くだされ誠に有り難うございました。光成さんもお元気な様子で何よりです。小生も今とのところ小康状態でござしております。飯田さんは懇切に彩の作品展望を書いて頂き感謝しております。

白金葭の益々のご発展とご活躍を祈念致し、取り急ぎ簡単ながら御礼申し上げます。草々

さくら咲く松千本に咲くはよし
遠富士のしろがね光り柿を剥く

(H. 25. 4. 9 平野ひろし)

光成高志様 めずらしく早目の投句です。お手数をおかけ致します。いつも編集、そして原稿執筆大変とお察し致します。御自愛の上精勤あらんことお祈り致します。取り急ぎ。草々 (H. 25. 4. 12 晴青木啓泰)

同封のコピ一、読んでも不敏のため、よくわかりませんでした。説明を読んで、白金葭の方々は私を除く人々のことかと合点致しました。皆様の益々の御活躍を祈ります。私はまだまだ雑念多く、なんとか元気でいます。(H. 25. 4. 16 小山陽也)

* * * 人間の生地について「人が真に生きるのはその人が楽しむ時であり、またその人自身を真に織りなしているのはその人の余暇である・・・ワーズワースも書いているように「これは自

分の時間だ、と言える時間こそがその人の人生だ」からである〔アクネス・リブリエル〕

受贈誌(四月号)

一万歩もうそろそろか落の薹(彩 20 句集) 平野ひろし

露草の目覚めの時間一万歩 (〃) "

苦瓜の風のふくらみカフエテラス (〃)

勾玉に紐通す穴雁渡し (〃)

牛蛙(じごろ)に声のありとせば (〃)

クレーンの音なく動く秋高し (〃)

帰省して九十八の母と寝る (〃)

階上に太宰の間あり雛の宿(彩 110 号)

日本の国(の)地上絵落花して (〃)

寒垢離(の)水に清めの塩と酒 (〃)

花時計花に数字に雪積もある (〃)

オラウータン一日も常のドンゴロス (〃)

恵林寺界隈何處へ行くも吊し柿 (〃)

芹青し百万トンの湧水地 (〃)

新聞に皺の指生え日向ぼこ (あすか 3月号)

鉱泉の鶴亀湯春福寿草 (同 4月号)

鰯は海の宝石晚酌す (飛行雲 66 号)

木村貞恵

宮川喜代子

杉山晃美

河端不三子

駿河岳水

山尾かづひろ

駿河岳水

こだま（俳誌交換主宰選句）

飛行雲春号（66号）駿河岳水主宰抽出

鳴門金時洗へばまこと色に出づ（22号）

光成高志

彩五月（110号）平野ひろし主宰抽出

光成高志

女正月源泉の泡背ナのぼる（23号）はとバスのぞらり並びて寒明くる（24号）

〃

光成高志

俳窓評論纂

*亀田虎童子句集「合鍵」を著者よりいたいた。氏は「董」の名譽代表として元気に闘病中である。三年前の「色鳥」に続き、今回四季別にまとめた第五句集として刊行された。筆者は故斎藤嘉久さんを通じて、虎童子さんを紹介され、今は同人として毎月五句の選をいたしている。病中吟であると断られている。札状に代え、左に好きな句を抜き出しました。

花便り葉書から文字零れさう

新築の家の烟を雉歩く（房総半島にて所見）

頭上に鳴く裏戸隠のほととぎす

晴天の草や樹の影蟻の影

喋らせてくれる人欲し梅雨の月

尺蠖の立ち上がりたる身のこなし

利根の波手賀のさざなみ盆の月

どのくらゐ重いか新米抱へみる

武藏野やかがしにもある身だしなみ

踏み応へありし落葉の小路かな

大寒や吾になかりし恵比須顔

*小林秀雄（1902～83）と河上徹太郎（同～80）（新潮社）の付録CDに収められているとの記事を読み、翌日八重洲ブックセンターにて購入した。私は、

小林秀雄の講演CDを車に積んでよく聴いている。とにかく歯切れがいい。結構早口である。なにより、「知ることと信ずること」などの還暦前のお元気な時の講演は、文学・芸術に深い愛情があつて、その言い回しもわかりやすく、声に張があつて圧巻である。今回のCDは最晩年の酒を酌みながらの対談であつて、最後は河上氏を送り出しての呟きで終つてゐる。

*あすか3月、4月号の山尾かづひろ著の**大江戸日記**

は題名の蛤の故を書いてある。それは、私も芭蕉の「貝おほひ」で引用した西行の「一見の浦の長い前書の歌に準えて、江ノ島への旅のこと及び、4月号では、これも先に紹介した源氏物語の「花宴」の朧月夜との危険な恋に立ち戻つ

ている。朧月夜は、花宴での光源氏の麗姿に一目惚れして三の口を開けていたのではなかつたか。朧月夜は伊勢物語の二条后高子が帝と男との恋に苦恼した高子に擬せられているとの指摘があるとか。光源氏に薄情にされるけれども、かえつて魅かれていく正直な心の持ち主こそ今に通じる魅力といえまいか。ここまで想像するのはやばいかも。かづひろさんは、近世の江戸時代の町人に源氏物語を語らせているので、なかなか大変な作業だと思いますが、気楽にすすめられればいいのではないかと思います。芭蕉の「貝おほひ」には光源氏を「ひかるお源」という町娘に仕立てたりして茶化しているほどですから。

三好達治を読む

II

武者昭七

三好達治の少年の日からのたび重なる流寓の日々の悲しみは、後年の「久恋のひと」萩原アイとの北陸流寓の日々にまで尾を引いていくのはよく知られた事実だ。詩人はつぎのように詠う。

山なみ遠に春はきて

こぶしの花は天上に

雲はかなたへかへれども

かへるべしらに越ゆる路

残雪をいただいた遠い山なみ、天上を覆いつくすほどに無数のこぶしの白い花。流れる雲にも帰るべき住まいはあるのに、帰るべき場のないままに越えていくこの路よ、と詩人はうたう。事実に即して言うならば「越ゆる路」は戦火をさけて愛人とおもむいた越前三国の港町であり、仮の住まいとはいえ愛の巣であつたろうに詩人はそれをも「帰る場も知らぬ」とうたう。三好にとつて人の世はなべて仮の住まいであつたのであつたろうか。ここにも青春の日の絶唱「春の岬」がまとつていた春愁と漂泊流浪の悲しみが影を落としている。次の詩も同じ。

あはれ花びらながれ
をみなごに花びらながれ

をみなごしめやかに語らひあゆみ

・・・

翳りなきみ寺の春をすぎゆくなり
み寺の甍みどりにうるほひ

廻々に

風鐸のすがたしづかなれば

ひとりなる

わが身の影をあゆまする鼈のうへ

(鼈のうへ 昭和五年「測量船」)

昭和十九年 花園 所収

(山なみとほに

落花の斎に落ちる薄墨色の孤独の影はかれの出発の当初から終世まといづけた長い影であった。

芭蕉のかるみ以後（25）

光成高志

蟬吟没後の宗房二十三歳から二十九歳に江戸に下るまでの六年間を推測する。貞門俳諧に忠実と言えども、本歌取りや時代の風潮を表す俗語を取り入れたり、宗房の才能が縦横に發揮された句を残している。二十三歳で藤堂家を辞し、二十四歳までは伊賀上野の生家で兄の下に居て俳諧を投句、二十五歳から二十七歳の三年間は京の禅林にて学問に打ち込む、二十八歳で伊賀に帰り、貝おほひを草稿、翌年二十九歳の正月これを天神社に奉納、三月代替わりの月に江戸に出立という経過を想像した。

うかれける人や初瀬の山櫻（続山井寛文七年）

この句は、京への旅の途中立ち寄った長谷寺でのものと思われるが、左の本歌のもじりである。

「うかりける人を初瀬の山嵐はげしかれとはいのらぬものを」源俊頼朝臣（千載集・恋二・七〇八、百人一首）。訳は、私につれなかつた人を、どうかして私に靡くように観音様に祈つたのに、初瀬の山おろしよ。

あの人があれが私につらく当るようには祈らなかつたのに、なんでこんなに激しいのだ、となる。初瀬の初は「果つ」の掛詞であつて、この恋は終つてしまつた嘆きの歌である。冬の初瀬は山中にて風が激しいところであり、初瀬参りのあわれさ、恋の哀しさ、人の世のあはれさが一首のなかに盛り込まれた物語性豊かな一首であるとか。宗房の句は「うかりける」を「うかれける」と一文字をえて「憂かりける」から「浮かれける」への転換を図つてゐる点、単純性が免れてゐる。これが貞門俳諧の潮流のままに流されているか、独自性があつて、宗房の個性が出てゐるところを見るかの分岐点である。しかしながら、寛文年間に出版された俳句集には、この本歌のもじり句が面白押しに載つてゐるのである。

1 うかれける人ぞ初瀬の花の番

2 うかれける人や初瀬の花見酒

3 うたひける人や初瀬の花見酒

4 うたひける人や初瀬の花に幕

5 うらみける人や初瀬の花の風

6 ぬかりける人や初瀬の花の跡

7 うつかりと人や初瀬の花ざかり

8 うかりける人は初瀬の花見哉

9 ひかりける火とは初瀬に飛ぶ萤

重賢（大和順礼）

高故（時世粧）

政尚（続金頼礼）

以仙（松葉俳林）

良綱（続金頼礼）

信之（詞林金玉集）

立静（時世粧）

治元（大和順礼）

宗賢（詞林金玉）

10 鵜飼ける人や初瀬の川遊び 正次（大和順礼）
よくもまあ本歌をもじつたものだと思う。貞門俳諧とは、この様なものであつたという例証になるであろう。
しかしながら、私はやはり、宗房の山櫻の句が、一番いいと思うがどうであろうか。

我孫子日記

3／22～25 *久米島。3／27～*2 浅草。3／31～*3 松虫寺。
4／4～5／4 京橋。4／6～5／5 矢切。4／8～6／6 真栄寺。
4／10～11／12 *7 身延山久遠寺～下部温泉。
泉。4／17～19 SOA。例会。

*地下ダムの湖面が見えて暮の春

ハーベスターントンガリガリ黍を刈る

高志

〃

ハテの浜てふ 南風の砂洲さようなら

高志

〃

緑立つ琉球松の丘越えて

みち

〃

砂糖黍春の刈り込み日暮まで

みち

〃

*2 馬酔木咲く雨の庭園伝法院
下向いて咲く八重しだれざくらかな

高志

〃

*3 花の庭四阿ありて碁盤あり
かたばみの黄の花咲くや猫通り

みち

〃

白金葭四月号（第26号）
発行所 我孫子市南新木2-14
編集・発行人 光成高志
(電話・FAX ○四一七一八七一〇六八)

編集後記

山吹や崖の窪みに祠あり

みち 高志 〃

*5 一面の花胥の丘スカイツリー
*6 花御堂義捐金箱置かれあり
甘茶仏地を指す指の滴れる
*7 菩提梯の両側著我の花咲けり
富士川の又蛇行して竹の秋

坊いくつ背後の山の山桜

みち 〃

下部温泉に何十年ぶりかに行つた。たまたま虚子の泊つた宿と同じホテルに泊つた。ご主人と雑談していって、井伏鱒二晩懇の「やまめ床」なる散髪屋さんを紹介してくれたので、帰りに立ち寄つて、その主から、鱒二の話を伺つた。鱒二の甥の方が私の高校の恩師であつたので、井伏先生から伺つていた事と合点するところ、新たな逸話、交友関係に龍太、達治などがいること、その写真も見た。こんな邂逅は50年前からの神のお導きとしか思えない。人生は面白い。